

PRESS RELEASE (2026/05/27)

**重症喘息の治療薬「テゼペルマブ」で約3分の1の患者が臨床的寛解を達成  
—世界初の前向き多施設共同介入試験 (TERESA 試験) —****【概要】**

九州大学の岡本勇教授（大学院医学研究院呼吸器内科学分野）、東京女子医科大学の神尾敬子講師（内科学講座呼吸器内科学分野）らの研究グループは、コントロール不良な重症喘息患者を対象に、生物学的製剤テゼペルマブ（商品名：テゼスパイア）による「臨床的寛解」の達成率を、世界で初めて前向きに検証した医師主導多施設共同介入試験（TERESA 試験）を実施しました。その結果、テゼペルマブ投与 52 週後に 34.6%の患者が臨床的寛解を達成しました。また、生物学的製剤未使用であること、および血中好酸球数が高いことが、臨床的寛解達成の独立した予測因子であることが明らかになりました。

本成果は、American Academy of Allergy, Asthma & Immunology の機関誌である The Journal of Allergy and Clinical Immunology に 2026 年 5 月 20 日にオンライン掲載されました。

**【研究背景】**

全世界で推定 3 億 6,300 万人が喘息に罹患しており、そのうち 5~10%は吸入ステロイド薬などによる治療を行っても十分なコントロールが得られない重症喘息です。近年、重症喘息治療では、増悪がなく、症状が安定し、経口ステロイド薬連用がなく、呼吸機能が良好な状態を長期間維持する「臨床的寛解」の達成が新たな治療目標として注目されています。しかし、これまでの臨床的寛解に関する研究報告は、後ろ向き解析や無作為化比較試験の事後解析に限られており、生物学的製剤使用歴のある患者を含む実臨床を反映した前向き臨床研究は実施されていませんでした。

**【研究内容】**

TERESA 試験 (jRCTs071230026) は、日本国内 24 施設で実施されたオープンラベル単群介入試験です。2023 年 6 月から 2024 年 1 月までに登録された、コントロール不良な重症喘息患者 107 例（うち 46.7%は生物学的製剤使用歴あり）を対象に、テゼペルマブ 210mg を 4 週間ごとに 52 週間皮下投与し、臨床的寛解達成率を前向きに評価しました。

**【主な研究成果】**

テゼペルマブ投与 52 週後、34.6%（約 3 人に 1 人）の患者が臨床的寛解を達成しました。生物学的製剤未使用患者および血中好酸球数 300 cells/ $\mu$ L 以上の患者で、臨床的寛解を達成しやすいことが示されました。一方、臨床的寛解に加え血中好酸球数かつ呼気一酸化窒素の炎症指標も正常化した「完全寛解」達成率は 9.3%にとどまりました。この結果から、症状や増悪の改善と、血中好酸球を主体とした現在の炎症指標の正常化は必ずしも一致しない可能性が示唆されました。

**【用語解説】**

生物学的製剤：特定の炎症性物質を標的とする抗体製剤

TERESA 試験：**T**ezepelumab-induced Clinical **R**emission in **S**evere **A**sthma (TERESA) study

テゼペルマブ：上皮サイトカイン TSLP に対するヒトモノクローナル抗体

オープンラベル単群介入試験：全参加者が公開された同じ薬剤の投与を受ける臨床試験

**【研究参加施設】**

九州大学病院、東京女子医科大学病院、慶應義塾大学病院、国立病院機構東京病院、昭和医科大学病院、東海大学医学部付属病院、国立病院機構福岡東医療センター、国立病院機構沖縄病院、鹿児島大学病院、産業医科大学病院、日本大学医学部附属板橋病院、帝京大学医学部附属病院、国立病院機構福岡病院、長崎大学病院、佐賀大学医学部附属病院、名古屋大学医学部附属病院、東京科学大学病院、久留米大学病院、福井大学医学部附属病院、山口大学医学部附属病院、北海道大学病院、大阪大学医学部附属病院、福岡青洲会病院、国立国際医療センター

**【謝辞】**

本研究は、アストラゼネカ株式会社からの資金提供により実施しました。研究の実施にあたり、ご協力いただいた患者さんおよび研究協力者の皆様、九州臨床研究支援センター (CRoS 九州) の皆様に深く感謝申し上げます。

## 【論文情報】

掲載誌：The Journal of Allergy and Clinical Immunology

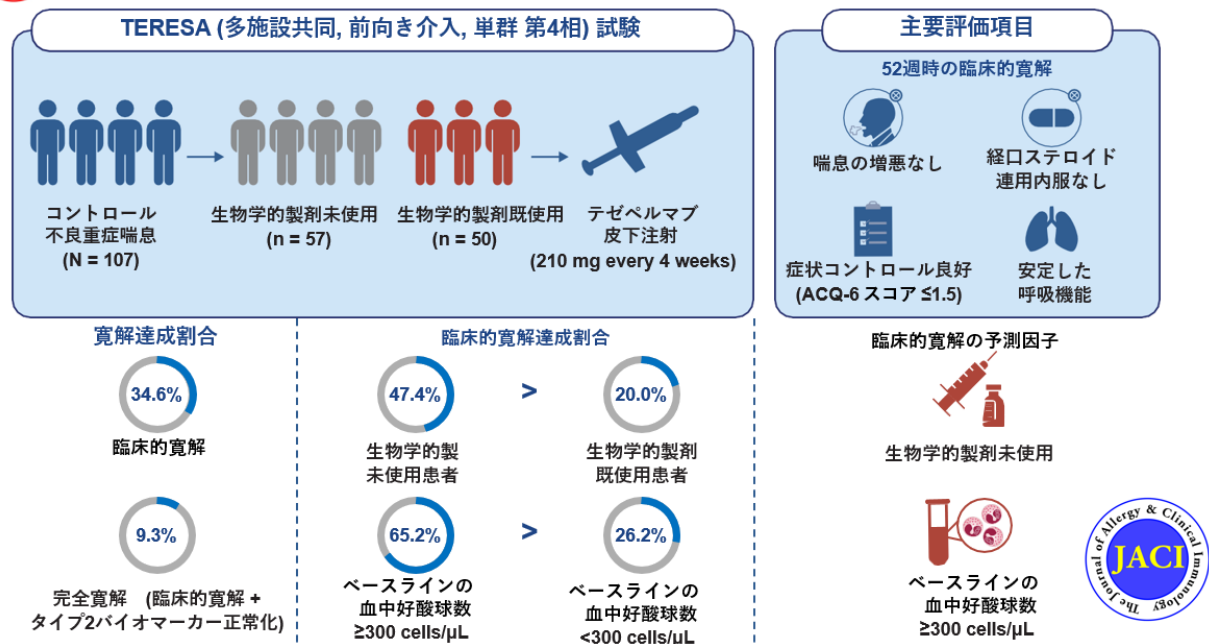
論文名：One-Year Clinical Remission with Tezepelumab in Severe Asthma: TERESA Single-Arm Prospective Study

著者名：Keiko Kan-o\*, Hiroko Watanabe, Kenji Chibana, Maho Suzukawa, Akihiko Tanaka, Katsunori Masaki, Shin Ohta, Hiroki Kabata, Koichiro Asano, Reiko Ito, Hiromasa Inoue, Takako Nakano, Hideki Kanda, Takafumi Yamashita, Yasushi Obase, Konomi Kobayashi, Naoya Sugimoto, Yoko Ito, Hiroaki Ogata, Koichi Takagi, Nobuharu Ohshima, Takashi Kinoshita, Hiroki Tashiro, Koichiro Takahashi, Keiji Oishi, Tsunahiko Hirano, Hideki Sakakibara, Konomi Sennari, Yukihiko Sugimoto, Takayuki Shiroyama, Susumu Fukahori, Tsuyoshi Oguma, Katsuyoshi Tomomatsu, Sho Shimada, Mitsuko Kondo, Tomohiro Akaba, Michihiro Yoshimi, Yuki Moriuchi, Mari Ujike, Miho Mitsui, Kaoruko Shimizu, Yuichiro Shindo, Seiko Takasawa, Keiko Wakahara, Tomoki Uno, Jun Miyata, Akane Ishida, Mayoko Tsuji, Akikazu Shimada, Isamu Okamoto.

DOI：10.1016/j.jaci.2026.05.006



## One-Year Clinical Remission with Tezepelumab in Severe Asthma: TERESA Single-Arm Prospective Study



### 研究者からひとこと：

TERESA 試験の名称は、治癒が難しい病気を抱える人々に寄り添い続けたマザー・テレサ (Mother Teresa) に由来し研究者が命名しました。喘息は「治らない病気」と考えられてきましたが、生物学的製剤の登場により、寛解や治癒を目指せる時代になりつつあります。

本研究では、テゼペルマブがどのような患者さんに対して特に高い効果を発揮するかを明らかにしました。一方で、複数の生物学的製剤や経口ステロイド薬を使用しても寛解の達成が難しい患者さんが一定数存在することも示されました。

こうした患者さんへの新たな治療法の開発に向けて、治療効果を予測できる炎症指標の探索や、ゲノム (遺伝子)・エピゲノム (遺伝子の働きを調節する仕組み) 解析を通じた病態の解明が、今後の重要な課題と考えられます。

東京女子医科大学 神尾 敬子

Kyushu University VISION 2030  
総合知で社会変革を牽引する大学へ

### 【研究に関するお問い合わせ】

東京女子医科大学内科学講座呼吸器内科学分野 講師 神尾 敬子  
TEL: 03-3353-8112 (内線 28892) Mail: kano.keiko@twmu.ac.jp

### 【広報に関するお問い合わせ】

九州大学病院 企画広報室  
〒812-8582 福岡市東区馬出 3-1-1  
TEL: 092-642-5205 FAX: 092-642-5008  
Mail: ibskoho@jimu.kyushu-u.ac.jp

東京女子医科大学広報課  
〒162-8666 新宿区河田町 8-1  
TEL: 03-3353-8111 FAX: 03-3353-6793  
Mail: kouhou.bm@twmu.ac.jp